

こちらフリースクールです。地域と繋がるには？

最近、「地域と繋がる」がテーマになっているフリースクール。きっかけは、NPO法人ETIC様の主催の研修に、スタッフが参加したことです。今の課題を洗い出し、これからの動きを考える研修で、フリースクールの情報を必要としている人に広く届け、地域全体で子どもを見守ることが必要であり、今できることは、「少しずつ地域と繋がること」とまとまったのです。また、この研修で一緒に、株式会社JTB様より、『「5」のつく日。JCBで復興支援』のご支援を頂くこととなりました。活動に関心を持って頂いたことへの喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。

地域とどう繋がっていくのか、スタッフだけで考えても始まりません。

そこで、子どもたちや保護者の皆様、他事業のスタッフにも声をかけ、「ワクワクしながら地域と繋がるには？」をテーマについて話し合う、「ワクワクタ食会」を開催しました。参加者は延べ40人以上。柔軟なアイデアが数多く出されました。子どもも大人も、保護者もスタッフも一緒にになれる、これがビーンズの強さです。この会のアイデアをもとに、地域を巻き込むイベントを開催します。また、地域との関わりを積極的に持つため、地区の運動会や清掃活動等に参加し、さらにオープンハウスも実施しました。フリースクールでカフェや、バザー等を行い、その雰囲気をもっと多くの人に味わってもらいました。今年は、地域の回覧板

にチラシを載せて頂いたり、同じ地区の企業や医療機関の駐車場を無料で貸して頂いたり、新たな取り組みを行った結果、イベント当日に来てくれた方は、総勢150名。多くの方に関心を寄せて頂き、これから地域と繋がっていけるという可能性を強く感じました。ご来場頂いた方々、当日や準備段階からご協力頂いた方々、本当にありがとうございました。



子育て経験を生かし、皆さんに寄り添った関わりを持ちたいと思います。

みんなの家@ふくしま
羽賀 京子



新
人
紹
介

温かい居場所の構築を目指し情熱をもって携わって行きます。

福島居場所部門
加藤 恵美



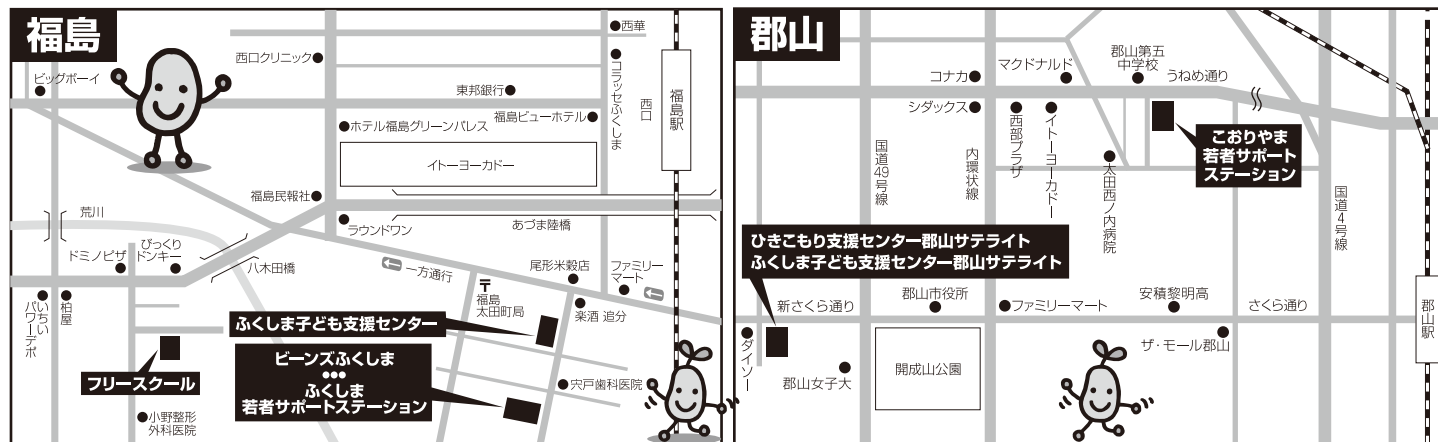
これからの活動予定

フリースクール

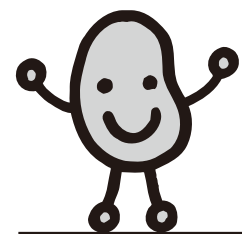
■2月4日(土) フリースクール餅つき大会

■3月11日(土) 卒業と成長を祝う会

※イベントの詳細につきましては、ビーンズふくしま事務局までお問い合わせください。



●ビーンズふくしまのホームページ こちらへアクセス → <http://www.beans-fukushima.or.jp/>



ビーンズ通信

●発行日/2017年1月10日

Vol.79

●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL <http://www.beans-fukushima.or.jp/>
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

謹賀新年



酉 2017

昨年は、皆様のご支援・ご協力をいただき、子ども若者支援の活動を進めていくことができましたこと、心から感謝申し上げます。

本年も、皆様とともに、子どもたちが自分らしく生きることができるよう目指して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

十二支の「酉」という字は、果実が成熟した状態を表していると言います。子どもたちが若者たちひとりひとりが、それぞれ実りある人生を生きていくために何が必要なのでしょう。自分の歩んでいく道を選ぶのは、彼ら自身です。でもその道の選択肢を見せてあげるのは私たち大人の責任です。そのためには、様々な体験をし、いろんな人と出会える「場」を創り、共に選択肢を考えていきたいと思っています。

特定非営利活動法人ビーンズふくしま

理事長 若月 ちよ

特集

みんなの家
@ふくしま

みんなの家@ふくしまがオープンして、2周年を迎えます!!

みんなの家@ふくしま(以下、みんなの家)が、オープンして今年3月で2周年を迎えます。昨年12月末までの利用者数は、6,248名(大人3,080名、子ども2,264名、若者390名、地域の大人514名)と、赤ちゃんからお年寄りまでが集まる多世代交流施設として、たくさんの方々に利用されています。

今から3年前、第1回目のままカフェ(県外避難され、その後福島に帰ってきた母親たちが集える場として県内各地で実施)を開催した時の母子の表情が今でも忘れられません。母親たちは、お子さんの手をしっかりとつなぎ、不安いっぱいの表情で、すぐるような思いでこの場に来てくれたのだと感じました。子どもが不安定な日は、母親も不安を吐き出していたりと、子どもが母親の不安を敏感に感じ取っている姿が見え、母親へのケア、そして、子どもが安心して遊

べる場の必要性を実感しました。そのために、母親の不安に寄り添い、子どもが子どもらしく安心して遊べる環境を作っていきたいと考え、県内各地で月1回ずつままカフェを開催しました。母親が悩みや不安を共有しあう仲間や手立てをままカフェの中で見つけ、次第に元気になっていくことで、子どもたちもまた本来の姿で遊べるようになっていきました。

そうした中で、日常的に親子が集える場が欲しいという思いを募らせ、常設の居場所としての「みんなの家@ふくしま」の開設へとつながりました。そこには、帰還してきた親子だけではなく、避難しなかった親子、また震災後に生まれたお子さんを持つ親御さんも含めたすべての親子が集える場としての「みんなの家@ふくしま」のスタートとなったのです。

もう一つ、ビーンズふくしまが、長年子ども若者支援に取り組む中で、感

じていたことがありました。それは、学校生活では(表面的には)とくに大きな問題もなく進んできたのに、社会への出にくさを抱えている若者たちの存在でした。若者たちの育ちの中で何が起きているのか……様々な社会背景の中で、子どもたちは育ちます。子どもたちが本来の力を出せない状況が、その中にあるとしたら……その子どもたちの育ちを支えるために、早い段階から子どもたちと、その子どもたちの一番身近な存在である親御さんたちと関われる場があれば……そのこともみんなの家の取り組みへとつながったのです。



子どもたちの「育ち」を支えるために……

多世代交流の場として

多世代交流にこだわったのには理由があります。それは、本来の地域社会(コミュニティ)の姿だからです。原発事故の影響を最も受けたのは、子育て世代ですが、どの世代も何らかの傷を負いました。例えば、若者たちは卒業式や入学式が延期になった話や、将来子どもを産み育てることへの漠然とではあるけれど不安を抱えていますし、高齢者は孫が遊びに来なくなったことで孤独を感じていました。そんな互いの選択や思いを認め合い、自らの力を再生していく場、バラバラになったコミュニティを紡ぎなおす場として、本来の地域社会を取り戻す場として、みんなの家はスタートしました。

そして、それは震災以前から言われていた地域社会の崩壊から生じる「孤立化」の課題への取り組みでもありました。

そんなみんなの家での取り組みを写真と共にお伝えします。

母親たちを支えるために

震災後の福島での生活について話し合うママトークや、子どもの年齢ごとに集まり子育ての悩みを共有する各トークday(ベビママ、中高生ママ等)の取り組みは、母親の孤立感や子育て不安の解消になっています。また、みんなの家を利用しているママたちが中心となって結成しているサポーターグループ「ぽかぽかFriends」が、毎月様々な企画を実施してくれていることは、母親たちが主体的に活動

する姿を、子どもたち若者たちが目にする機会ともなり、とっても良いモデルになっていると思います。また、彼女たちの中には、「避難先でお世話になったから恩返し of 気持ちでサポーターになった」と言ってくれている方もいて、あたたかい気持ちのバトンが受け渡されていると感じると共に、彼女たちが支えられる側としてだけでなく、支える側としてもいてくれることを感じます。

▼ベビママdayの様子



▼みんなで一緒にお昼ご飯を食べることも多い



父親たちを支えるために

3名の父親と実行委員会形式で実施している「F-ぱぱプロジェクト」では、家族が避難し福島に単身で生活している父親を中心としたぱぱカフェや、アウトドアでの家族同士の交流会を実施しています。異業種、異年齢での、しかも父親同士の交流は福島県内でも非常に珍しく、震災から6年目を前にますます孤独に陥りやすい父親同士の交流の機会は、今後も求められくと思います。父親同士が繋がり合うことが、それぞれに心の余裕を生み出し、母親と共に子どもたちの育ちを支えることができるようになっていくのだと思うのです。



▲芋煮会を開催したときにはBBQも行いました

地域の中で育つ子どもたち

みんなの家がある笹谷団地は、平均年齢が80歳以上という高齢化の進んだ戸建ての団地です。団子さしや豆まき、ひな祭りなどの伝統行事などはもちろん、町会の皆さんと一緒にいったハロウィンの日は、閑静な住宅地をそれぞれに変装したかわいい子どもたちが団地内を若者達と共に練り歩き、笑顔と歓声が響き渡る大好評のイベントとなりました。一人暮らしのお年寄りも多いため「また子どもたちに会いたい」と、みんなの家に来てくれるきっかけにもなりました。子育て中の若い母親にとっては子育ての大先輩から、自らの子育てを褒めてもらったり認めてもらえたりすることが、不安になりがちな福島での子育てを地域の中で見守ってもらえているという実感となり、心強く感じているようです。

本来地域は、子どもたちの育つ場であり、地域の方たちは子どもたちの育ちを支える役割を担ってくれていました。そんな本来の姿を取り戻す取り組みとして、地域の方たちとの活動を行っていきたいと思っています。



▲ハロウィンイベントの様子
◀地域の方に教えてもらいながらの「ちまき」づくり

若者たちの活躍の場として

ユースプレイス県北の若者たちが、週に1回みんなの家の2階で活動していくこともあり、若者たちと親子との交流が自然な形で深まりました。子どもたちはお兄さんお姉さんと遊ぶのが大好きですし、若者たちは得意なこと(遊ぶことや手芸やお菓子作りなど)を子どもたちに教えることで、彼らの自信に繋がっていると感じることがあります。多世代交流の場は、それぞれをエンパワメントしていく場でもあるのです。

特に今年度から新たに取り組んでいるビーンズ畑での農作業では、ふくしま若者サポートステーションの若者たちも加わり農作物を作り収穫し、



それらをみんなで調理し「みんなdeカフェ」として、みんなの家の利用者の皆さんに提供しています。ユースプレイスの若者の中には、調理を手伝ったり、セッティングを担当したりと毎回準備段階から参加してくれる人も増えてきました。安心できる場の中で、いろいろな人に出会い、様々な体験を重ねることで若者たちはその自信を回復していくのです。

2周年を迎えるみんなの家が目指すもの

みんなの家は、平成29年1月から「復興交流拠点 みんなの家セカンド」をオープンします。この復興交流拠点では、帰宅困難区域などから避難してきた親子や仮設住宅、復興公営住宅で生活している人々と元々福島市で生活していた人々との交流を目的とした様々な活動やイベントを開催します。みんなの家を中心としてつながってきた地域における取り組みを、同じ地域内にできた復興公営住宅で生活する皆さんとの活動へと広め展開していきます。この取り組みを通して、子どもたちの育ちを支えられる地域社会を、地域の皆さんと共に創っていきたくて考えています。

生きにくさを抱える子ども若者たちが、自ら望む姿で、繋がることのできる社会をめざし、子どもたちの育ちを支える「みんなの家@ふくしま」事業に取り組んでいきたいと思っています。